

おたふくかぜワクチン予防接種説明書

1. おたふくかぜとその症状

せきやくしゃみなどにより空中に飛び出したムンプス（おたふくかぜ）ウイルスを吸い込むことにより感染します。潜伏期間は2～3週間で軽度の発熱と耳の痛みで始まり、耳の下（耳下腺）の腫れが顕著になりますが、その症状は通常5～7日で回復に向かいます。

2. おたふくかぜと合併症

おたふくかぜの合併症としては無菌性髄膜炎、ムンプス難聴、脳炎、睾丸炎（精巣炎）、卵巣炎、膵炎などが報告されています。合併症が起こる頻度は、無菌性髄膜炎（症状としては発熱、頭痛、嘔吐）が10人～100人に1人、ムンプス難聴が約1,000人に1人、脳炎（症状としては発熱持続、けいれん、意識障害）が5,000～6,000人に1人と報告されています。思春期頃におたふくかぜにかかった人のうち、数%の人が睾丸炎（症状としては発熱、睾丸膨張）を合併しますが、男性不妊の原因になることは極めてまれです。

3. 免疫

おたふくかぜの感染者は小学校低学年や幼稚園の子どもたちに多く見られます。一度おたふくかぜにかかった人が耳下腺炎を起こす例も再発性耳下腺炎として報告されていますが、ムンプスウイルスの感染によるという確実な証拠はありません。予防接種を受けた人のほとんどに免疫ができます。しかし、抗体の低下する症例が報告されており、ワクチンの有効率は90%前後ではないかと考えられています。小さいころにおたふくかぜにかかった場合、特徴的な症状を示さない、いわゆる不顕性感染で終わる例もあります。すでに抗体のある人にワクチン接種をしても問題はなく、免疫は高められます。

4. ワクチンの効果と副反応

①おたふくかぜワクチンの効果

おたふくかぜワクチンは弱毒生ワクチンで、身体の中でワクチンウイルスが増え、抗体ができます。抗体はワクチン接種を受けた90%前後の人にでき、おたふくかぜに対する免疫はワクチン接種2週間からできます。おたふくかぜの潜伏期間にワクチンの接種を受けても、特におたふくかぜの症状が重くなるようなことはありません。

②おたふくかぜワクチン接種後の副反応

おたふくかぜワクチン接種後2～3週ごろに、発熱、耳下腺の腫れ、嘔吐、咳、鼻汁等の症状があらわれることがあります。これらの症状は通常、数日中に消失します。

接種後3週間後に、発熱、頭痛、嘔吐等の症状が見られる無菌性髄膜炎が数千人に1人程度の頻度、接種後数日から3週間後に紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等症状の見られる血小板減少性紫斑病が100万人に1人程度の頻度で、また頻度は不明ですが、急性散在性脳脊髄炎や脳炎、脳症、急性膵炎があらわれることがあります。まれに難聴、精巣炎があらわれたとの報告があります。

接種後（30分程度）にショック、アナフィラキシー（蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫等）がまれにあらわれることがあります。

5. 接種にあたっての注意事項

予防接種の実施においては、体調の良い日に行うことが原則です。健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等に相談の上、接種するか否かを決めてください。また、以下の状態の場合には予防接種を受けることができません。

- ①明らかに発熱（37.5℃以上をいいます）がある場合
- ②重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ③受けるべき予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある場合
- ④明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合及び免疫抑制をきたす治療を受けている場合
- ⑤その他、医師が不適当な状態と判断した場合



6. 予防接種健康被害救済制度

ワクチン接種によって重篤な副反応が発生した場合は、障害の程度により湯沢市予防接種事故災害補償規定により、災害補償がなされます。また独立行政法人医薬品医療器械総合機構救済制度により、一定の給付が行われる場合もあります。

※給付申請の必要が生じた場合には、診察した医師、市子ども未来課へご相談ください。

《接種後の注意》

- ①予防接種を受けた後30分間は、実施場所でお子さんの様子を観察しましょう。
- ②接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすらない様にしましょう。また、激しい運動は避けましょう。
- ③予防接種後1か月間は、抜歯・扁桃腺摘出術・ヘルニア手術等は原則として避けることが望ましいといわれています。